

<研究ノート>

日本語教師のための AI の活用方法について

陳 祥*・安達万里江*・山島 一浩*

How to use AI for Japanese language teachers

Hsiang CHEN *, Marie ADACHI * and Kazuhiro YAMASHIMA *

抄 録

本稿では、日本語教育の現場において AI がどのように活用されているか、特に日本国際学園大学を事例として紹介する。同大学は、留学生の増加により教員の負担が大きという課題を抱えており、AI を活用することで、この問題を解決しようとしている。例として、自動採点、パーソナライズ学習、会話練習など、様々な場面において活用されている。「日本語リテラシー A」、「留学生日本語 B1」の授業では、AI が文献検索やアウトライン作成をサポートし、学生はより高度な学習に集中できる。また、「留学生日本語 A1」では、AI が会話練習のパートナーとなり、学生は自然な日本語でのコミュニケーションを練習できる。このような AI の活用は、日本語教育の質の向上をもたらすとともに、教員の負担軽減にもつながる。今後、AI は、大学のみならず、企業や NPO など、様々な機関における日本語教育にも導入され、多様な学習ニーズに対応したプログラム開発が期待される。

This paper presents a case study of how AI is being used in the field of Japanese language education, particularly at the Japan International University. The university is faced with the problem that the increase in the number of international students is placing a heavy burden on its teaching staff and is trying to solve this problem by utilizing AI. Examples include automated grading, personalized learning, and conversation practice. In the “Japanese Literacy” class, AI assists students with literature searches and outlining, allowing them to focus on more advanced learning. In “Japanese A for International Students,” AI serves as a conversation partner, allowing students to practice natural communication in Japanese. Such use of AI will not only improve the quality of Japanese language education, but also reduce the burden on instructors. In the future, AI is expected to be introduced into Japanese language education not only at universities but also at various other institutions, such as corporations and NPOs, to develop programs that meet diverse learning needs.

キーワード：日本語教師、AI、文章作成能力、会話練習

* 日本国際学園大学 経営情報学部、Japan International University

1. はじめに

ここ数年の日本語教師の動向は、非常に活発で変化の激しい状況となっている。2024年度以降からは、登録日本語教員になるための資格試験の導入や、登録日本語教員養成機関の増加など、日本語教師の質の向上が求められている。日本語教師に求められる能力の1つに ICT 活用能力がある。オンライン授業やデジタル教材を効果的に活用できる能力のほか、人工知能（以下 AI）の活用能力が求められている。これらは、日本語教育の分野は常に変化しているため、継続的な学習意欲として、新しい知識やスキルを習得し続けるための学習意欲が求められている。

本稿では、まず、日本語教育関係者および留学生が Web から利用できる AI 技術について紹介する。次に、日本国際学園大学（以下、本学）の日本語教員が AI 活用の必要性について直面した背景について取り上げ、本学の日本語教育科目の AI 活用方法について報告する。そして、その中での指導課題、それに対する解決策について考察する。最後に、本稿のまとめと今後の展望を述べる。

2. Web で見える AI 技術

ここでは、機械学習、自然言語処理などの基礎知識は控えておき、Web のブラウザから利用できる代表的な AI 製品やサービス「ChatGPT」「Claude 3.5 Sonnet」「Gemini」について紹介する。そして、本章以降では、これらを総じて「AI」と呼び、本学の日本語教育での活用方法について述べたい。

OpenAI が出した「ChatGPT」は、高度な自然言語処理を使用して、会話の生成や質問応答を行う AI モデルである。留学生に推奨する ChatGPT の活用方法をいくつか紹介する。まず言語学習のサポートについて、ChatGPT を使って会話練習をしたり、文法の質問をしたりす

ることができる。そして、それは、日常会話の練習にも最適である。日本語でのコミュニケーションスキルを向上させたい場合、ChatGPT と会話することで実践的な練習ができる。リラックスした環境で話す練習ができるために適している。簡単な質問への回答もできる。日常生活で疑問に思ったことや、ちょっとした知識を知りたいときに活用できる。例えば、「つくばの天気は?」「日本で健康に良い食べ物は?」など、幅広い質問に答えてくれる。文章の校正や編集にも利点がある。自分で書いた文章をチェックしてもらえたり、改善点を提案してもらえたりできる。メールの文面やレポートなど、さまざまな文章の校閲に役立つこともできる。ChatGPT は、アイデア出しやブレインストーミングにもつかえる。プロジェクトや趣味で新しいアイデアが必要なときに、ChatGPT に相談することで多様な視点や提案を得ることができる。

こうして、学習サポートは、宿題や勉強でわからないことが出てきたときに、わかりやすく解説してくれる。歴史の出来事の説明など、幅広い教科に対応している。

Anthropic 社が開発している「Claude 3.5 Sonnet」は、複雑な設定や専門知識が不要で使いやすく、自然な会話形式で利用できる。様々な分野に関する情報を提供でき、初心者学習や情報収集を支援してくれる。日本語の他多言語に対応しているため、母国語で利用できる。質問の意図を理解し、適切な回答や説明を提供してくれる。初心者でも理解しやすい形で情報を獲得できる。学習サポートとしては、複雑な概念を分かりやすく説明し、段階的な学習を助ける。これらの特徴で、初心者にとって使いやすく、多様な場面で役立つツールとなっている。

また、Google が提供している「Gemini」がある。Google の対話型 AI ツールで、質問への回答や創造的なコンテンツの生成を行う。利用は Google アカウントを通じて行う。まるで人と会話しているかのように、自然な言葉で質問や指示を出すことができる。難しい専門用語を使

わなくても、自分の言葉で気軽に話しかけることもできる。多様な質問に対応しているため一般的な質問から専門的な質問まで、幅広い質問に答えてくれる。複数の回答を提示して、同じ質問に対しても、複数の回答を提示してくれる。また状況や目的に合わせて、最適な回答を選ぶことができる。また情報の要約ができる。長文の文章も、要約して簡単に理解できるようにしてくれる。ニュース記事や論文などを効率的に読み込むことができる。また文章の書き出しや、特定のテーマに沿った文章の作成など、創造的な文章作成をサポートしてくれる。多くの言語に対応しており、日本語だけでなく、英語やその他の言語でも利用できる。

以上、これらのサービスはそれぞれ異なる機能を持つものが、本学の日本語教員および留学生のニーズに応じたサポートを提供している。次章では、これら AI の日本語教育への役割と可能性についてまとめる。そして、AI の重要性について確認したうえで、次章以降で「4. 本学の日本語教育」について報告し、「5. 日本語教師のための AI の活用方法」について報告する。

3. AI の日本語教育への役割と可能性

日本語教育における AI の重要性をここでは、3つあげる。1つ目は、個別化された学習体験を提供し、学習者のニーズに応じた教材を生成できるという点である。発語練習について、AI は音声認識技術を用いて、学習者の発音を評価する。また音声との比較によって、学習者の発音と比較し、改善点を発見できる。また、発音のフィードバックすることにより、具体的な改善点をしめす。AI を使った会話練習では、AI は会話練習の相手として機能し、学習者が実践的な日本語を使用する機会を提供する。またシナリオベースに会話が可能で、実際のコミュニケーションに近い体験が得られる。AI は、自然な対話を模倣し、学習者がリアルな会話スキルを身につける手助けをする。

2つ目は、学習者の進捗に対してカスタマイズ化している。AI は、学習者の進捗を分析し、適切な難易度の問題を提供している。これにより、学習者は自分のペースで学ぶことができる。学習データの分析では、学習者のデータを活用した改善をすることができる。例えば AI は学習者のデータを分析し、学習の進捗や弱点を把握する。また、学習者のパフォーマンスをトラッキングし、個別の学習プランを提案してくれるであろう。学習傾向の分析では、データ分析により、学習者の傾向を把握し、効果的な学習方法を見つけ出してくれる。

3つ目は、フィードバックの適時性である。AI は、リアルタイムでフィードバックを提供し、誤りを即座に修正する。続いて、AI を用いた教材作成である。AI は大量のデータを分析し、効率的な教材を生成する。これにより、最新の情報を反映した教材が提供される。AI は、自然言語処理の活用から、文法や語彙に基づいた問題を自動生成する。学習スタイルの考慮としては、AI は学習者のスタイルに応じた教材を提供し、視覚的、聴覚的、体験的な学習をサポートする。

4. 本学の日本語教育

安達・亀田 (2024) は、本学の留学生サポート体制やその連携の実態について詳細に報告している。梅本 (2022) は留学生の履修人数が増加しているにもかかわらず、限られた教員数ではその対応が困難であることを指摘している。具体的には、本学には約 100 人の留学生が在籍している一方で、日本語教育を担当する常勤助教が 2 名、非常勤講師が 2 名という状況である。このため、教員一人当たりの負担が著しく増大し、質の高い教育を提供することが難しくなっているだろう。

このような現状に対処するためには、筆者は AI 技術の導入が不可欠であると考えている。AI は、学習者のニーズに応じた個別化されたサポートを提供する能力を持っており、教員の

負担を軽減することが期待される。例えば、AIを活用した自動化されたフィードバックシステムや学習リソースの提供により、教員はより効果的に学生の指導に専念できるようになる。この研究では、AIを日本語教育にどのように活用できるかを探求し、留学生への教育リソースの効率化を図ることを目的としている。最終的には、AIの導入によって留学生に対するサポートの質を向上させ、学習環境の改善を実現することが期待される。

5. 日本語教師のための AI の活用方法

2024年度春学期において、1年生留学生在が履修する日本語科目には「日本語リテラシー A」「留学生日本語 A1」および「留学生日本語 B1」が含まれ、これらはいずれも必修科目である。その中でも「留学生日本語 A1」と「留学生日本語 B1」は週2回の授業が設定されており、その結果、教員にとって授業の事前準備および事後処

理にかかる負担が大きいと考えられる。

このような状況を踏まえ、教員が組織内で AI 技術を効果的に活用するためには、授業内容や到達目標に応じた具体的な AI 活用法の提案が求められる。各科目の授業の目的や内容について詳細に説明し、その特徴に応じた AI の応用可能性を探ることが重要である。

以下では、各科目の特性や学生の学習ニーズに適した AI 活用の具体例を提示し、教育現場における AI 技術の有効な導入方法を探ってみる。

まず、「日本語リテラシー A」科目について説明する。「日本語リテラシー A」は、学生がアカデミックな文章を書く力を養うことを目標としており、特に日本語を高度に理解し活用できる力を培うことを目的としている。この科目では、文章を効果的に読み、解釈し、それを基に自身の考えを明確に表現するための書く力を強化するためのトレーニングを行う。科目の目標は下記の通りである。

表1 授業シラバス（一部抜粋）

授業の到達目標
<p>〈到達目標〉</p> <p>①文章作成に必要な手順を理解し、必要な資料を集めてアウトラインを作成することができる。</p> <p>②作成する文章にふさわしい表現を理解し、おおむね適切に使用することができる。</p> <p>③読んだ資料について、聞き手がおおむね理解できるように説明することができる。</p>
<p>〈履修目標〉</p> <p>①文章作成に必要な手順を理解し、必要な資料を十分に集めてアウトラインを作成することができる。</p> <p>②作成する文章にふさわしい表現を理解し、適切に使用することができる。</p> <p>③読んだ資料について、聞き手がよく理解できるように説明することができる。</p>
授業概要
<p>日本語の豊かな使い手になるために、主として読む力と書く力を伸ばすためのトレーニングを行う。必要な資料を収集し読み解きながら、読み手を意識したアカデミックな文章を書く力を身につける。また、読んだ資料についてわかりやすくまとめて伝える力を身につける。</p>

授業では、必要な資料を収集し、それを読み解くプロセスを通じて、資料の内容を的確に把握し、それを他者にわかりやすくまとめて伝え

る能力の向上を目指す。特に、学術的な文献を扱い、その内容を整理・分析し、自分の言葉で説明する力を鍛えることが重視されている。

授業では、留学生がアカデミックな文脈での日本語運用能力を向上させるために、3つの指導課題が挙げられる。

(1) 必要な資料収集

学術的なリテラシーを向上させるため、適切な資料を自ら収集する能力が求められる。特に、信頼性のある文献やデータを選び出し、目的に沿った情報を効率的に集めるスキルを養成することが重要である。これにより、論文執筆やプレゼンテーションの際に質の高い内容を提示できる基盤が築かれる。

(2) アウトラインの作成

学術的な文章を効果的に構成するためには、論理的なアウトラインを作成するスキルが必要となる。これは、情報を整理し、論点を明確にするために不可欠であり、文章全体の流れをスムーズに保つための重要なプロセスである。授業では、学生が自身の考えを論理的に構築し、的確に表現できるよう指導が行われる。

(3) 日本語の表現

日本語の表現力を向上させるためには、正確で自然な言葉遣いが重要である。特に、留学生にとっては適切な語彙選びや文法の使い方を学ぶことが課題となる。授業では、アカデミックな場にふさわしい表現や、より自然な日本語で文章を構築する力を強化することが求められる。

これらの課題に対する解決策として、AI は教育現場において補助的な役割を果たすことができ、特に教師の負担軽減と学生への効果的な支援の提供という側面で大いに貢献する可能性がある。以下に、AI の具体的な利点について述べる。

(1) 必要な文献資料リストをピックアップする

AI は、膨大なデータベースやオンラインリソースを活用して、学生にとって重要な文献資料リス

トを自動的にピックアップすることで、リサーチプロセスを効率化できる。これにより、学生は信頼性の高い文献や学術論文を迅速に収集し、時間を大幅に節約できる。教師は、学生が利用すべき資料の質と内容に集中することで、授業の質を向上させることができる。

(2) アウトラインのテンプレートを作成する

AI は、学術的な文章の構成をサポートするため、アウトラインのテンプレートを自動生成する機能を提供できる。これにより、学生は論理的な文章構成を迅速に作成し、内容の整理や論点の明確化に集中できる。教師は、アウトラインの初期提案後に学生が修正や再構成を行う際も、適切なフィードバックや代替案を提供することが可能で、より完成度の高いアウトラインの作成をサポートする。

(3) 日本語の表現を指摘する

AI は、学生が使っている語彙・文法が文脈に適しているかどうかをチェックし、不自然な表現や過度に形式的・口語的な言い回しを指摘する。これにより、状況に応じた適切な語彙・文法の使用を促進できる。教師は、学生の書いた文章に対し、より自然な日本語表現を提示し、ネイティブスピーカーに近い言い回しを学ばせることができる。

そして、日本語科目「留学生日本語 A1」科目について説明する。「留学生日本語 A1」は、学生が大学で専門領域を学ぶ上で必要不可欠な漢字語彙力を養成することを目標としており、特に読み書きの能力を重視した授業内容となっている。この科目では、漢字の理解を深めると同時に、学術的な文献を効果的に読む力や、正確に書く力を培うことが求められる。具体的には、さまざまな漢字の意味や用法を学ぶことで、学術的な文章における表現力を向上させることを目指す。科目の目標は下記の通りである。

表2 授業シラバス（一部抜粋）

授業の到達目標
<p>〈到達目標〉</p> <p>① N2レベルの漢字語彙の読み書きができる。</p> <p>② 発話等の情報源からおおまかな内容を理解できる。</p> <p>③ ある程度適切な語彙と文法を用い、発話の構成を考慮しながら、自分の意見や主張を伝えられる。</p> <p>④ グループワークやディスカッションに参加できる。</p>
<p>〈履修目標〉</p> <p>① N1レベルの漢字語彙の読み書きができる。</p> <p>② 新聞記事、新書等に使われている漢字・語彙の意味が理解できる。</p> <p>③ 発話等の情報源から内容を十分理解し、要点を正確につかむことができる。</p> <p>④ 適切な語彙と文法を用い、発話の構成を考慮しながら、発音を意識して流暢に自分の意見や主張を論理的・説得的に伝えられる。</p> <p>⑤ グループワークやディスカッションに積極的に参加し、自分と異なる意見や文化等を配慮しながら、対話することができる。</p>
授業概要
<ul style="list-style-type: none"> ・ 大学で専門領域を学ぶために必要な漢字語彙を学ぶ。 ・ 日常の様々な場面の会話を聞き、自然な反応・返答ができるようにする。 ・ リスニング内容についてグループでディスカッションを行う。 ・ シャドーイング等、音声表現の練習を行う。

授業では、記事や小説などの読み物の内容を理解し、その要点を正確に把握することを重視している。学生は、読み取った内容を基に話題をグループワークやディスカッションを通じて共有し、意見を交換する能力の向上を目指す。これにより、学生は批判的思考を養い、他者の視点を理解する力を強化することが期待される。授業では、対話を通じて自らの意見を構築し、表現するスキルを向上させるために、2つの指導課題が挙げられる。

(1) 場面に相応しいコミュニケーション能力

場面に応じた会話スクリプトを作成することは、コミュニケーション能力の向上に不可欠である。特に、バリエーション豊かな表現を使いこなすことが大きな課題となる。授業では、各課のテーマに適した表現力や、より身近なパターンへの書

き換え能力を高めることが求められる。

(2) 日本語の表現

円滑なコミュニケーションを実現するためには、話す力と聞く力が非常に重要である。特に留学生にとっては、自ら話題を提供したり、相手の話の内容を適切にフォローしたりすることが大きな課題となる。授業では、日常生活に適した表現や、自然に会話を続けるための日本語コミュニケーション能力を育成することが求められる。

これらの課題に対する解決策として、AIは教育現場において補助的な役割を果たすことができ、特に教師の負担軽減と学生への効果的な支援の提供という側面で大いに貢献する可能性がある。以下に、AIの具体的な利点について述べる。

(1) 場面に相応しい会話スクリプトを提供する

AIを活用することで、会話スクリプトを基に特定の場面に応じたカスタマイズが可能である。自分と同じ意見や異なる意見を取り入れることで、より多様な会話パターンを生成し、自らの主張を強化することができる。教師は、学生の書いた会話スクリプトを指導し、フィードバックを行い、学びを深めることができる。

(2) 日本語の表現を指摘する

AI はリアルタイムで会話を支援し、適切な応答や質問を提案することで、自然な対話を促進できる。また、AI は異文化に関する情報を提供し、留学生が文化的背景を理解する手助けをすることで、よりスムーズなコミュニケーションを支

援する。教師は、学生の書いた会話スクリプトを指導し、フィードバックを行い、個々の成長を促すことができる。

また、日本語科目「留学生日本語 B1」について説明する。「留学生日本語 B1」は、新聞やそれに相当するレベルの文章を読んで概要が理解できることを目標としており、特に文章等を読み、内容を十分理解し、過不足なく要約ができることを目的としている。この科目では、適切な語彙と文法を用い、文章の構成を考慮しながら、自分の意見や主張を論理的・説得的に伝えられるための書く力を強化するためのトレーニングを行う。科目の目標は下記の通りである。

表3 授業シラバス（一部抜粋）

授業の到達目標
〈到達目標〉 ① N 2レベルの文法を理解できる。 ② 文章等を読み、大まかな内容を理解できる。 ③ ある程度適切な語彙と文法を用い、自分の意見や主張を伝えられる。 ④ 新聞やそれに相当するレベルの文章を読んで概要が理解できる。
〈履修目標〉 ① N 1レベルの文法を理解、運用できる。 ② 文章等を読み、内容を十分理解し、過不足なく要約ができる。 ③ 適切な語彙と文法を用い、文章の構成を考慮しながら、自分の意見や主張を論理的・説得的に伝えられる。 ④ 新聞やそれに相当するレベルの文章を読んで詳細まで理解できる。
授業概要
メインテキストに沿って進め、各課のテーマについて意見交換、語彙・文法、読解、作文等の学習活動を行う。

授業では、日本語科目「留学生日本語 A1」と同様に、記事や小説などの読み物の内容を理解し、その要点を正確に把握することを重視している。学生は、読み取った内容を基に作文を書く能力の向上を目指す。これにより、学生は自分の意見や主張を伝えられる力を強化するこ

とが期待される。授業では、対話を通じて自らの意見を構築し、表現するスキルを向上させるために、2つの指導課題が挙げられる。

(1) 文章能力

文章能力とは、情報を明確に伝えるための構

成力、表現力、文法の正確さを含むスキルである。留学生にとっては、異なる文化や言語背景を持つため、文章能力の向上が特に重要である。日本語での表現や文法を学び、効果的にコミュニケーションを図ることで、学業や日常生活での円滑な交流が可能になる。

(2) 自分の意見・主張

自分の意見を伝えることはコミュニケーションの基本であり、特に留学生にとっては文化的な背景を考慮しつつ効果的な方法を学ぶことが重要である。相手への配慮が必要であり、理解し合うためには異なる視点や価値観を尊重する姿勢が求められる。これにより、より深い対話が生まれ、相互理解が可能になる。

これらの課題に対する解決策として、AIは教育現場において補助的な役割を果たすことができ、特に教師の負担軽減と学生への効果的な支援の提供という側面で大いに貢献する可能性がある。以下に、AIの具体的な利点について述べる。

(1) 文章能力を評価する

AIは作文や会話練習の自動採点やフィードバック提供にも役立つ。学生が提出した作文の文法ミスを指摘したり、適切な表現を提案したりすることが可能である。教師は、学生が書いた作文を指導し、フィードバックを行い、より効果的な学習支援を指導することができる。

(2) 自分の意見・主張

AIは多様な意見を反映した学習内容を提供し、学生のニーズに合わせる学習支援を行うことが可能である。これにより、個々の学習スタイルやニーズに応じたカスタマイズが可能となり、効果的にスキルを向上させることができる。また、異なる視点を取り入れることで、より広範な知識や理解を深める機会が増えるため、学生は自らの意見を形成しやすくなると期待する。教師は

学生の作文を指導し、フィードバックを行うことで、学生の成長を促進し、学びの質を向上させることができるだろう。

6. おわりに

以上、本稿では、日本語教育におけるAI活用の可能性と具体的な活用例について考察した。日本語教師が抱える課題、特に留学生の増加による教員負担の増加や、日本語教育における多様なニーズに対応する必要性などを背景に、AIがどのように学習体験の質を向上させ、教員の負担軽減に貢献できるかについて論じた。具体的には、AIを活用した自動採点システム、学習内容のパーソナライズ、音声認識技術を用いた発音練習、会話練習の相手役、学習データ分析など、様々な場面でのAI活用の可能性を示した。また、日本語教育における様々な科目(日本語リテラシー A、留学生日本語 A1、留学生日本語 B1)におけるAI活用の具体的な例を挙げた。これらの例は、AIが日本語教育における学習内容の理解、語彙・文法の習得、作文の練習、コミュニケーション能力の向上など、多岐にわたる学習支援を提供できることを示しており、今後の日本語教育におけるAI技術の活用が期待されることを示唆している。

日本語教育におけるAI活用は、学生数の増加と教員不足という現状に対し、教員の負担を軽減し、個々の学習ニーズに対応できる質の高い教育を提供するための解決策として位置付けている。具体的には、以下のような現状と課題、そしてAIによる解決策を示した。

現状は、日本国際学園大学では、約100人の留学生に対して、日本語教育を担当する常勤助教が2名、非常勤講師が2名しかいない中で生じる課題は、教員一人当たりの負担が大きく、質の高い教育を提供することが難しいという問題があったとき、AIによる解決策は、AIを活用した自動化されたフィードバックシステムや学習リソースを提供することで、教員の負担を軽減

し、学生へのきめ細かい指導を実現するのではないかと考えるのである。

AI による具体的な課題解決策は、本学の日本語科目「日本語リテラシー A」、「留学生日本語 A1」、「留学生日本語 B1」では、それぞれの授業目標を達成するために、AI は以下の様な役割を担うことができると考える。

「日本語リテラシー A」では、アカデミックな文章作成能力の向上である。そして、その課題は、必要な資料収集、アウトライン作成、適切な日本語表現の習得をどうするかである。AI による解決策としては、必要な文献資料リストの自動ピックアップ、アウトラインのテンプレート作成などがあげられる。

日本語表現のチェックと修正提案は、「留学生日本語 A1」では、専門領域に必要な漢字語彙力とコミュニケーション能力の向上だろう。この課題は、N1～N2レベルの漢字語彙の読み書き、場面に応じた適切なコミュニケーション能力、自然な日本語表現の習得が求められる。

AI による解決策は、場面に応じた会話スクリプトの提供、リアルタイムな会話支援と適切な応答・質問の提案、異文化理解を深める情報の提供を補助してくれる。

「留学生日本語 B1」は、新聞レベルの文章読解と要約、意見表現能力の向上は、課題として N1～N2レベルの文法理解と運用、文章

要約能力、文章構成力、適切な日本語表現、意見や主張の伝え方の習得にあるが、その解決策としては、作文や会話練習の自動採点とフィードバック、多様な意見を反映した学習内容の提供、個々の学習スタイルやニーズに合わせた学習支援がある。これらの AI の活用により、教員は学生一人ひとりに寄り添った指導が可能となり、学生は自分のペースで効率的に学習を進めることができると期待される。

多文化共生社会の実現に向けて、日本語教育は単に言語を教えるだけでなく、日本の文化や社会についても理解を深めていくための教育へとシフトしている。日本語教育の場は、大学や専門学校だけでなく、企業、NPO 法人など、多様な機関に広がっている。今後は、それぞれの機関の特性に応じた日本語教育プログラムが開発されるであろう。

参考文献

- [1] 安達万里江・亀田千里 (2024) 「筑波学院大学の日本語教育—過去・現在の考察と日本国際学園大学の日本語教育への提案—」『筑波学院大学紀要第 19 集』 pp.45-53.
- [2] 梅本佳子 (2022) 「アカデミック・ライティング学習におけるピア・レスポンスの効果」『筑波学院大学紀要第 17 集』 pp.75-85.